私たちの命、生活を自ら守ろう！
～ 阪神淡路大震災の経験を横浜で役立てよう ～

［松山 順三氏との意見交換会レポート］

■ 開催日時：２０１９年7月２７日 １０時～１２時
■ 開催場所：横浜市白山地区センター（緑区） ２階 中会議室
■ 参 加 者：２９名（講師含む）
■ 講　　師：松山 順三氏（災害のパーソナリティ）
　　・元神戸市職員
　　・阪神淡路大震災時、神戸市須磨区対策本部で活動
■ 目　　的
・講師の体験談から、災害にどう対処するかを学び考える。
・普段抱いている災害に対する疑問や不安を講師に問い、
　解決のヒントを得る。

◆◆◆　神戸から学ぶ　◆◆◆

【発災時の様子】
・２４年前の１月１７日午前５時４６分、冬の真っ暗な中で突然に震度７の大地震が発生した。
・多くの家が潰され、市内で７０ヶ所を超える大火災が発生し、６４００名の死者が出た。
・死者の大半は、地震で倒壊した家屋、火事で焼け落ちた家屋の下敷きによるものだった。
・昭和５６年（建築基準法改正）以降の建物は、震度７にも耐えた。
・家は潰れなかったが、家具の下敷きになって亡くなった人が多かった。
・家具の転倒防止対策の効果がなかった事例が多かった。（突っ張り棒の使用方法が不適切等）
・重たいテレビ（当時はブラウン管式）やピアノも飛んできた。
・家は傾いても、隣の家に寄り掛かって倒れずに済んだ事例が沢山あった
・着の身着のまま裸足で外に飛び出し、落下物や飛散したガラスでケガをした人が多かった

【発災時の講師の心理状態】
・停電で真っ暗な中、何が起こったのか全く見当がつかなかった。
・揺れは２０秒ほどだったが、実感としては２０分にも思えた。
・日頃、震災の勉強はしていても、恐怖感の中では慌ててしまう。

【教　訓】
・慌てて外に出ることは危険！（余震による落下物や飛散したガラス破片等での二次災害）
・火を使っていたら消す。（神戸でも、火を消していたら大火災は防げ、多くの人が助かった。）
・家が潰れなかったら、命は助かる！
　昭和５６年（建築基準法改訂）以前の建物は、命を守るために耐震工事を行った方が良い。
・激しい揺れにも耐えられるように、家具を固定する。（神戸の地震の振幅は約３ｍ）
・家具の転倒防止対策は、突っ張り棒の使い方など適切な方法によること。
・吊り天井や照明器具の落下にも対応が必要である。
・役所も消防も警察も病院も被災者であり、すぐに救助は来ない、救援物資も届かない。
・警察や消防が救えるのは局地的で、電話を掛けても繋がらない、助けには来てくれない。
・隣近所の助け合いが、人の命を救う。
・時間によっては、避難所は開いていない。
・夏場の避難所運営は、食料や衛生面の管理等でより困難になる。
・復旧後の通電時には、通電火災への対策が必要となる。
・いざという時には、機転を利かせて行動すること、英知を働かせることがとても重要！

【発災直後の被災者救助の実態】

・役所は、職員が殆ど出勤しておらず全くの人手不足で、どこに、どれだけの人たちが避難しているのか、街中がどうなっているのか、死者が出ていることさえ把握出来ていなかった。
・発災当時に活躍していたのは、地元の消防と警察であった。
・当日中に自衛隊も駆けつけたが、当時の自衛隊は救助装備が不十分だった。（スコップのみ）
・助かった人たちの３／４は隣近所の助け合いによるもので、消防や自衛隊、警察による救出者は１／４だった。（東北や熊本、新潟でも同じ状況）
・消火栓から水が出ず（水道も）、港から消防艇で海水を汲み上げ、火災現場まで消防車を縦に７台繋げて消火に当たった。（横浜でも応用出来る。）

【発災直後の避難所の様子と課題】
・学校関係者が出勤していなかったため、避難所（公立小学校・中学校）が開いていなかった。
・神戸の最大の避難所は、鷹取中学校（神戸市須磨区）で、５０００人が避難して来た。
避難所に大多数の避難者が来たら、マニュアル通りの運営は出来ない。
その中でも、お互いが助け合えるにはどうしたら良いか？
・３日目の夜に救援物資の第一便としておにぎりが届いたが、被災者に対しては４人に１個しかなく、圧倒的に不足だった。配るべきか？
⇒避難者は、１個のおにぎりを４人で分け合ってくれた。
・避難所には、ペットを連れた人たちが沢山来る。どう対応するか？
⇒ペット対策のため、みんなで話し合い、犬と猫を連れた人たちをそれぞれに分けた。
・食べ物よりも大事なのがトイレ！トイレを無理に我慢すると死に至る。
多くの人が、一度にトイレに行ったらどうなるか？どう対応するか？
⇒校庭の隅に溝を掘り、シートを被せて、男女別の屋外トイレを作った。
・避難所の食糧や水の備蓄量は最小限で十分ではなく、特に水は足りなかった。
アレルギーのある方用の食糧もなかった。
・多くの外国人が避難して来たが、生活様式も食文化も異なるため、数日で殆どが出て行った。
外国人対策をどうするか？
（参考）外国人とのコミュニケーションを図る時、子供や若い人たちに動いてもらう手もある。
・避難者は、指定以外のあらゆる所（児童館、寺院、公立高校等）、マンホールにさえも入っていた。都市型災害における難しいところで、念頭に置かなければならない。
・賞味期限切れの商品が届いたら、どうするか？貴重な食料を捨てられるか？
⇒先ず職員が試食をし、大丈夫だと判断したら配ったが、冬場だったからこそ出来ことであり、夏場だったら無理だった。
・運営が男性主体だったため、調達品から女性用品が漏れていた。
⇒紙オムツを裁断して代用した。

【誰が中心になって避難所を運営したか？】
・神戸では、大きくは以下の５通りの方法で避難所を運営した。
① 学校の先生たちが運営する。
② 地域の自治会が運営する。
③ 役所の職員が運営する。
④ 全国から集まったボランティアが運営する。
⑤ 避難者自身が自主組織を作って運営する。
・一番スムースに運営できたのは⑤であり、一番手間取ってダメだったのは④だった。
・避難所や仮設住宅は、一時的な緊急避難場所であり、如何に早く自分自身の生活を取り戻すかが本当の意味の復興である。自主的な運営組織の人たちには、その力があった。

【須磨方式による避難者情報の収集】
・拠点となる避難所に職員を配置し、周囲の避難所の情報を収集した。
・指定以外も含めた全ての避難所から手書きの名簿を提出してもらい、パソコンに全ての情報を入力し、共有した。（名前、年齢、避難先、住所、連絡先）

・仮設住宅の入居者についても、保険所の様式で必要な情報を全員から提出してもらった。

◇◇◇　他の災害からの教訓　◇◇◇

・大阪北部地震では、学校のブロック塀が倒れて女児が亡くなった。
「危ない！」と言う認識は誰もが持っていても、犠牲者が出ないと対策がされない、法律が変わらないと対策がされない。
・東日本大震災時、宮城県名取市では、殆どの方が津波で亡くなった。
「津波てんでんこ」という良い言い伝えが残っていたのに、活かされなかった。
先人の教えを忘れないよう、口酸っぱく言い続ける必要がある。
・西日本豪雨における岡山の水害では、逃げる機会は十分にあったにも拘わらず、隣近所の助け合いがなく、多くの犠牲者（高齢者）が出た。

◆◆◆　講師の想いと今後の課題　◆◆◆

・当時の様子や復興の歴史が風化しつつある中、どうにかしてそれらを伝えて行きたい。
・いつ襲われるか分からない災害に対し、自分の子供たちや家族を守る術を講じて欲しい。
・命さえ助かれば何とかなる！
災害国である日本は、災害に叩かれ続けながらも、世界に冠たる文化を誇り続けている。
・いざという時に、どうすれば自分の命を守れるか、自分自身で考えて欲しい。
・命を守るためにハザードマップをよく見て、自分の地域にはどういった危険性があるのかを知り、それに対応できるように心構えをして欲しい。
・自分が大丈夫だったら、助ける立場に立って欲しい。
・どんなに良いマニュアルを作っても、携わった人の性格やハート等で運用は変わってくる。
マニュアルは、「人を大事にする」、「人間」と言うものを基準に運用しなければならない。
・人を救うのはコミュニティ、隣近所で助け合える地域であって欲しい。
・津波に襲われれば、横浜市も含め特に沿岸部では、津波被害は甚大なものになる。
東日本の例も念頭に置いて、津波に対しても忘れずに対策をして欲しい。
・市民の立場に立つのが市であるが、災害救助法では（国の立場である）県の指示で動かざるを得ないと言う難しさがある。どう上手く立ち回れるかは市民の応援で決まる。
・人の命を助けるためには、個人情報であっても情報をオープンにしてみんなで助け合うべき。
・当時の自分は、市民を救助する立場であったが、（救助の）お膳立てが何もなかった。その中で震災を過ごして来たので、今は全国から届いた暖かい支援へのお礼がしたい。

☆☆☆　質疑応答　☆☆☆

Ｑ１．最近は自治会に参加しない人が増えているが、自治会との関係はどうなっているか？
Ａ１．自治会メンバーの高齢化や減少により、どこも自治会が徐々に機能しなくなっている。
要援護者を救う最前線は民生委員である。いざという時、民生委員が持つ情報をオープンにして皆で助け合えるか否か？（そう動いて欲しい。）

Ｑ２．防災拠点への保健師や看護師の派遣はあるか？
（質問者の拠点では、その場で資格を持っている人を募ることを考えている。）
Ａ２．病院側も被災者であり、病院も医療関係者も絶対数は足りない。
全国の医師会や日赤から派遣される医療関係者を受け入れる区役所に相談すれば良い。

Ｑ３．神戸での大規模火災に対する消火活動では、様々な葛藤があったと思うがどうだったのか？
Ａ３．消火栓から水が出ず、建物を壊して防火帯を作ることも出来なかったため、燃えるに任せるしかなく、あれだけの大火災になった。（打つ手がなかった消防署員は泣いていた。）

Ｑ４．火事の原因は何だったのか？
Ａ４．朝の炊事の火で、一番は朝の仕込みをしていた商店街からの出火だった。
（炊事の火）を消していたら、あの大火は防げたし、助かった人も多かった。

Ｑ５．神戸では、避難所の運営はどのくらいの期間続いたのか？
Ａ５．仮設住宅の第１期着工は発災から３ヶ月後の４月、入居はその１ヶ月後、本格化したのは８月からだった。（それでも早い方である。）
避難所である学校に一番長くいた人は、二次避難所を開設する８月下旬までだった。

Ｑ６．避難所での犯罪には、どう対応したか？
Ａ６．神戸では、避難所での犯罪はなかった。
ただし、避難所にも反社会的勢力も含め様々な人たちが避難しており、対応に苦慮した。
皆さんも、同じ経験をされるかもしれない。

Ｑ７．ドローンによる偵察や安全のためにも、神戸では電柱の地中化の動きはないか？
Ａ７．震災当時、神戸では電柱の地中化はされていなかった。復旧活動は地上の方が早く、結果、今も神戸ではあまり地中化は進んでいない。（復興時に地中化の議論はした。）

Ｑ８．校庭にブルーシートでトイレを作った際は、個室を作ったのか？
Ａ８．基本的には個室であるが、当初はブルーシートの数が足りず、男女の区別しか出来なかった。
ブルーシートの数が増えるに伴い、個室化を進めて行った。

Ｑ９．緊急トイレの汲み取り等には、どう対応したのか？
Ａ９．神戸も汲み取りは少なく、バキュームカーも少なかった。（横浜も同じ）
東京都の環境局が、バキュームカーを何台か派遣してくれたが、トイレが詰まる、流せない、汲み取りが間に合わないという劣悪な環境の中で、我慢して用を足してもらっていた。

Q10．神戸には、当時、拠点運営委員会のような仕組みはなかったのか？
A10．神戸は、地震も何もない安全安心な町だった。（従って、そう言った組織はなかった。）
震災時は、拠点となる避難所（学校）に市の職員を派遣し、学校関係者と協力して情報を集め、やがて運営組織を作った。

◇◇◇　参考情報　◇◇◇

１．二次避難所の設置について
須磨区では、避難所の学校の校庭には仮設住宅を建てず、被害のなかった地域の体育館や文化センターなどを二次避難所にして、出来る限り避難者を集約した。
・二次避難所では、段ボールで間仕切りをした。（全国初；２人なら４畳半、子供がいたら６畳）
・二次避難所の隅には、男女別の更衣室を作り、シャワールームも作った。
・ごみの焼却炉の排熱を利用した温水プールを、工夫して大浴場に変えた。

２．磯子区における要援護者支援に関する事例
・自治会に加入している全ての世帯（加入率；９０数%）から、毎年度毎に家族情報（名前、年齢、血液型、障害の有無、要介護情報等、書ける範囲）を任意で提出してもらっている。
（高齢化に伴う見守りも含めて「安全安心カード」と呼称）
・要援護者情報は、地域の地図に１軒ごとに書き込み、自治会の役員・班長に配布している。
・配布資料のセキュリティ・プライバシー保全を徹底している。

３．白山地区の防災への取り組みに関する事例
・お互いが助け合うための「お互い様カード」を作成し、防災拠点の委員長と班長に配布しているが、個人情報との関係の指摘があり、話し合い中でもある。
・防災や防犯に限らず諸問題をみんなが共有し、協力し合えるようにしたいが、課題も多い。
・防災拠点の鍵は、学校の他に拠点管理委員長と他の委員３名が保管している。
・防災訓練を年に２回行っている。

―　以　上　―